

# 「指定文」を中核とするいくつかの構文の分析

## 「変項名詞句」「量関係節」「潜伏疑問」「主要部内在型関係節」

西垣内 泰介  
神戸松蔭女子学院大学

2015年12月19日  
「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」研究発表会

### 1. 「変項名詞句」

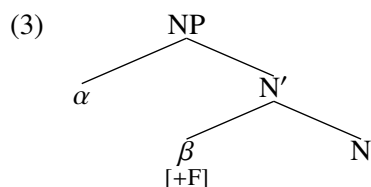
「変項名詞句」(西山 2003)

- |               |                                |
|---------------|--------------------------------|
| (1) a. 洋子の趣味  | (2) a. 海外旅行が洋子の趣味だ。            |
| b. タカシの身長     | b. 185cm がタカシの身長だ。             |
| c. 奈緒美のケータイ番号 | c. 090-1234-1234 が奈緒美のケータイ番号だ。 |
| d. ビールの量      | d. 2リットルがビールの量だ。               |

この論文では、西垣内 (2015) で提案されている「指定文」の分析を発展させ、「変項名詞句」を基本として、「量関係節」、「潜伏疑問文」さらに「主要部内在型関係節」のあらたな分析の方向性を示していく。

### 2. 「中核名詞句」と「指定文」

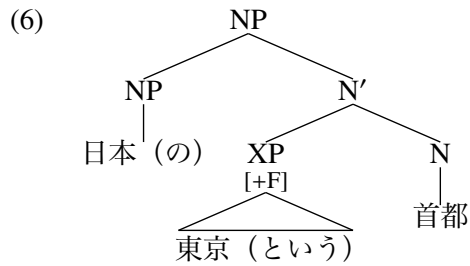
分裂構文以外で述部に名詞を持つ指定文は、次のような2項をとる名詞句を中核として派生するという西垣内 (2015) の分析をその基盤として仮定する。このような名詞句を「中核名詞句」と呼ぶ。



- (4) 「中核名詞句」の主要部 N は、外項  $\alpha$  が N の意味的領域を限定 (delimit) し、内項  $\beta$ [+F] が  $\alpha$  によって限定された N の意味内容を「構成する」(constitute) 意味内容を持つ範疇である。

☞ constitute = exhaustively specify (Higgins 1973)

(5) 東京が日本の首都だ。



(7) 東京が [日本の  $x$  首都] だ。  
 value of  $x$           variable          copula

☞ 「変項名詞句」が「変項を含む名詞句」(variable-containing NP)を意味するとすれば、本分析は「変項」の存在を統語構造の中で明確にする点で、先行研究と異なっている。

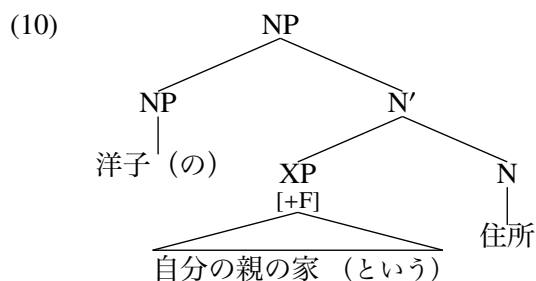
### 3. 「変項名詞句」のヴァリエーション

#### 3.1. 構造と派生

(2) a. 海外旅行が洋子の趣味だ。

(8) [<sub>NP</sub> 洋子の [<sub>N'</sub> 海外旅行 (という) [<sub>N</sub> 趣味]]]

(9) 自分<sub>i</sub>の親の家 (の住所) が 洋子<sub>i</sub>の住所だ。



(11) 洋子の住所が変わった。

(12) [<sub>DP</sub> Op<sub>i</sub> [<sub>NP</sub> 洋子の [<sub>N'</sub> t<sub>i</sub> [<sub>N</sub> 住所]]]]

(13)  $\lambda x$  住所 (洋子,  $x$ )

☞ 「洋子の住所」の意味 = 「洋子の住所」の「値」の集合

#### 3.2. 「潜伏疑問」

(14) 警官が洋子の住所を尋ねた。

(15) [<sub>CP</sub> Op<sub>i</sub> [<sub>NP</sub> 洋子の [<sub>N'</sub> t<sub>i</sub> [<sub>N</sub> 住所]]]]

## 4. 「量関係節」

## 4.1. 「量関係節」の構造と派生

- (2) d. 2リットルがビールの量だ。  
 (16) 2リットルがタカシが飲んだビールの量だ。

(16)の、下線を施した部分がわれわれが考える「量関係節」(amount relatives) (Carlson 1977)の日本語で実現する形の原型である。

(17)  $[_{NP}$  タカシが飲んだビールの  $[_{N'} 2$  リットル (という)  $[_N$  量]]

- (18) a. 2リットルがタカシが飲んだ~~ビール~~の量だ。  
 b. 2リットルがタカシが飲んだ~~ビール~~の量だ。  
 (19) タカシが飲んだ~~ビール~~の量は、2リットルだ。  
 (20) a. タカシが飲むビールの量が増えている。  
 b. タカシが飲む~~ビール~~の量が増えている。  
 c. タカシが飲む~~ビール~~の量が増えている。

(21)  $[_{Op}_x [_{NP}$  タカシが飲んだビールの  $[_{N'} x$   $[_N$  量]]]

## 4.2. 「量関係節」の主要部名詞

- (22) a. 100万円が慰謝料の総額だ。  
 b. 慰謝料の総額は100万円だ。  
 c. 慰謝料は100万円が総額だ。  
 (23) a. 100万円が慰謝料の一部だ。  
 b. 慰謝料の一部は100万円だ。  
 c. 慰謝料は100万円が一部だ。

本分析の立場からは、(23)の容認性が低いのは(22)の「総額」が定義可能な部分(例えば「全体」と同額を表す「部分」)を表す概念であり、ある金額が「総額」を「構成する」と言えるのに対して「一部」は定義できない部分を表す概念であることによる。

- (24) マリが1ヶ月に稼ぐ半分をタカシがギャンブルに使う。  
 (25) マリが1ヶ月に稼ぐ{一部/大部分}をタカシがギャンブルに使う。

☞ (25)には「量関係節」の解釈はない。

- (26) a. 25万円がマリが1ヶ月に稼ぐ{半分/(総)額}だ。  
 b. \*25万円がマリが1ヶ月に稼ぐ{一部/大部分}だ。

- (27)  $[_{NP}[マ리가稼ぐお金] [_{N'}25万円(という) [_{N}半分/(総)額]]]$   
 (28) 25万円がマ리가1ヶ月に稼ぐお金の{半分/(総)額}だ。  
 (29) 25万円がマ리가1ヶ月に稼ぐお金の~~(総)額~~だ。  
 (30) マ리가1ヶ月に稼ぐお金の~~(総)額~~は25万円だ。

Ishii (1991) の『『半分』関係節』の分析では、「お金」の削除は含まれておらず、空演算子 (empty operator) が移動する方法がとられている。

- (31)  $[_{NP}[_{CP} Op_i [_{C'}[_{IP} \dots t_i \dots]]] [_{NP} 半分]]$   
 (32) a. ??John は [Mary が [[自分の妹が \_\_ 稼いだ] 事実] を認めた] 倍を稼ごうと思っている。  
 (Ishii 1991: 226, 例 (6))  
 b. ??John は [Mary が [\_\_ 稼いだ から] ヨーロッパに行った] 半分も 稼がなかった。  
 (Ishii 1991: 226, 例 (7))  
 (33) a. ??[Mary が [[自分の妹が \_\_ 稼いだ] 事実] を認めた] お金  
 b. ??[Mary が [\_\_ 稼いだ から] ヨーロッパに行った] お金  
 (34) A が B に {あげた / 渡した / 送った} 半分以上を C が D に {あげた / 渡した / 送った}。

本分析も「量関係節」の派生に演算子移動を用いるが、それは「量」「半分」などを主要部とする「中核名詞句」の内項から DP 指定部に移動するものである。(24) の「量関係節」は次の構造と派生によるものである。

- (35)  $[_{DP} Op_x [_{NP} [マ리가1ヶ月に稼ぐお金] [_{N'} x [_{N} \{半分/額\}]]]]]$

#### 4.3. 「量関係節」と「潜伏疑問」

「量関係節」として成立する表現は、それが現れる選択的環境によって「潜伏疑問」として解釈できる。

- (36) a. 警察はタカシが飲んだ(ビールの)量を調べている。  
 b. 母親はマ리가1ヶ月に稼ぐ(お金の)額を知りたがっている。

#### 4.4. 「量関係節」の指定部

Ishii (1991: 224) は『『半分』関係節』の統語的派生には演算子移動が関わっており、移動によって生み出されるギャップ「空所」が義務的に必要だと主張している。

- (37) a. John は Bob が家賃にお金を使う 半分以上をギャンブルに使う。(Ishii 1991: 225, 例 (3))  
 b. John は Bob が Mary にお金を貸した 半分以上をギャンブルに使った。  
 (38) 10万円が Bob が家賃にお金を使う 半分以上だ。

- (39)  $[_{NP}[\text{Bob が 家賃にお金を使う}] (\text{ことの}) [_{N'}10 \text{ 万円 (という)} [_N \text{ 半分}]]]$
- (40)  $[_{DP} \text{Op}_x [_{NP}[\text{Bob が 家賃にお金を使う}] (\text{ことの}) [_{N'} x [_N \text{ 半分}]]]]]$
- (41) タカシがビールを飲んだ 倍 (の) ワインをマリが飲んだ。

#### 4.5. 「量関係節」と主要部内在型関係節

前節で見た空所を含まない「量関係節」は、主要部内在型関係節の特性を持っている。Nishigauchi (2004) は、主要部内在型関係節が成立するためには節の中で主要部として働く表現—典型的には不定名詞句—の意味対象の存在が含意されることが必要であるとしている。

##### 否定

- (42) a. タカシが飲まなかったビールの倍のワインをマリが飲んだ。  
b. \*タカシがビールを飲まなかった倍のワインをマリが飲んだ。

##### 「創造」(creation)

- (43) a. タカシが書いている本の倍 長い論文を マリが書いている。  
b. \*タカシが本を書いている倍 長い論文を マリが書いている。

##### 願望

- (44) a. タカシが飲みたがっているビールの倍のワインをマリが飲みたがっている。  
b. \*タカシがビールを飲みたがっている倍のワインをマリが飲みたがっている。

##### モダリティ

- (45) a. タカシが飲むかも知れないビールの倍のワインをマリが飲みたがっている。  
b. \*タカシがビールを飲むかも知れない倍のワインをマリが飲みたがっている。

##### 主要部潜在型関係節

- (46) タカシは小麦粉を ミルク, 卵, 砂糖と混ぜた 量をはかっている。

##### 「Spray paint 交替」(Spray paint hypallage)

- (47) a. 101 教室に花をかざった 半分を 102 教室にかざった。  
b. ??101 教室を花で かざった 半分で 102 教室をかざった。

## 5. 「変項名詞句」の主要部

## 5.1. 2種の「変項名詞句」

西山 (2003: 72-92) にはさまざまな名詞句が「変項名詞句」としてはたらく例を示している。

「非飽和名詞」を主要部とするもの

- (48) a. 太郎は洋子の趣味を尋ねた。(西山 2003: 80, 例 (50a))  
 b. 花子は自分の欠点がわからないようだ。(西山 2003: 80, 例 (53a))  
 c. 客は、その本の定価に関心がある。(西山 2003: 80, 例 (54a))

(2) a. 海外旅行が洋子の趣味だ。

(8)  $[_{NP}$  洋子の  $[_{N'}$  海外旅行 (という)  $[_N$  趣味]]

(49)  $[_{CP}$   $Op_i$   $[_{NP}$  洋子の  $[_{N'} t_i$   $[_N$  趣味]]]

「非飽和名詞」を含まないもの

- (50) a. 警察官は、その女の子に彼女の通っている小学校をきいた。(西山 2003: 79, 例 (47))  
 b. 山本教授は、鈴木助手の研究している細菌を問いただした。(西山 2003: 80, 例 (49a))  
 c. 母に問いつめられて、わたくしは、ついに自分の好きなひとを白状した。(西山 2003: 80, 例 (51a))  
 d. 刑事は、盗難車の写真リストを太郎に見せながら、太郎がその時目撃した車を尋ねた。(西山 2003: 80, 例 (52a))

1. これらの下線部の名詞句が「変項名詞句」としてはたらくのは、それぞれの発音される形式の主要部をなす名詞によるのではない。

2. 「量関係節」の議論の中で主要部の「量」「(総)額」が発音されない文が可能

(18) b. 2リットルがタカシが飲んだビールの量だ。

(29) 25万円がマリが1ヶ月に稼ぐお金の(総)額だ。

(50a-d) の下線部の名詞句に「の名前」をつけると、それぞれが意図されると思われる意味に近いものが得られる。

- (51) a. 警察官は、その女の子に彼女の通っている小学校の名前をきいた。  
 b. 山本教授は、鈴木助手の研究している細菌の名前を問いただした。  
 c. 母に問いつめられて、わたくしは、ついに自分の好きなひとの名前を白状した。  
 d. 刑事は、盗難車の写真リストを太郎に見せながら、太郎がその時目撃した車の名前を尋ねた。

## 5.2. 主要部 ‘ID’

(50a-d) の下線部の名詞句は「名前」に近い意味を持つ主要部を持ち、「量関係節」と平行した構造を持った「中核名詞句」から派生する。この主要部名詞は「名前」などと同じクラスに入るが発音されることがないもので、‘identity’ という意味をもつ ID という要素であると仮定する。

- (52)  $[_{NP} [_{NP} \text{彼女の通っている小学校}] (\text{の}) [_{N'} A \text{小学校 (という)}] [_N \text{ID}]]]$   
 (53) A 小学校が彼女の通っている小学校だ。  
 (54)  $[_{CP} \text{Op}_x [_{NP} [_{NP} \text{彼女の通っている小学校}] [_{N'} x [_N \text{ID}]]]]]$

## 5.3. 2種の「変項名詞句」の構造

この節では、この2種の「変項名詞句」の構造上の違いについて考える。

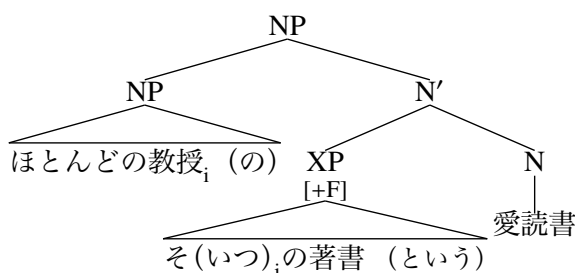
- (55) a. 鈴木教授の愛読書  
 b. 鈴木教授が好んで読む本  
 (56) a. 山田さんの愛車  
 b. 山田さんがいつも乗る車  
 (57) a. 『一般言語学講義』が鈴木教授の愛読書だ。  
 b. 『一般言語学講義』が鈴木教授が好んで読む本だ。  
 (58) a. ミニ・クーパーが山田さんの愛車だ。  
 b. ミニ・クーパーが山田さんがいつも乗る車だ。  
 (59)  $[_{NP} \text{鈴木教授} (\text{の}) [_{N'} \text{『一般言語学講義』} (\text{という})] [_N \text{愛読書}]]]$   
 (60)  $[_{NP} \text{山田さん} (\text{の}) [_{N'} \text{ミニ・クーパー} (\text{という})] [_N \text{愛車}]]]$   
 (61)  $[_{NP} \text{鈴木教授が好んで読む本} (\text{の}) [_{N'} \text{『一般言語学講義』} (\text{という})] [_N \text{ID}]]]$   
 (62)  $[_{NP} \text{山田さんがいつも乗る車} (\text{の}) [_{N'} \text{ミニ・クーパー} (\text{という})] [_N \text{ID}]]]$

(59), (60) では「鈴木教授」「山田さん」がそれぞれ「中核名詞句」の指定部を占めているが、(61), (62) ではそれぞれ「中核名詞句」の指定部の一部となっている。

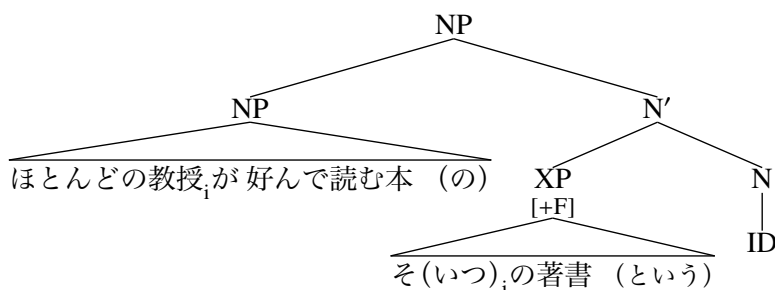
この構造上の違いを明らかにする一つの方法として、不定・量化名詞句による代名詞束縛の可能性を見ることがある。

- (63) a. そ<sub>i</sub> (いつ) の著書が [ほとんどの教授]<sub>i</sub> の愛読書だ。  
 b.?\* そ<sub>i</sub> (いつ) の著書が [ほとんどの教授]<sub>i</sub> が好んで読む 本だ。
- (64) a. そ<sub>i</sub> (いつ) の会社の製品が [ほとんどの技術者]<sub>i</sub> の愛車だ。  
 b.?\* そ<sub>i</sub> (いつ) の会社の製品が [ほとんどの技術者]<sub>i</sub> がいつも 乗る 車だ。

(65) a.



b.



(65a) では「ほとんどの教授」が指定部をなしており、内項の中の代名詞「そ (いつ)」を c 統御しているのに対し、(65b) では「ほとんどの教授」が指定部に含まれており、代名詞を c 統御していないことが (63ab) の容認性の対比を説明する。

この考察は、西山 (1990) で言及されている、「好んで読む本」が「非飽和名詞句」として働くという可能性を否定するものである。

(66) [<sub>NP</sub> [ほとんどの教授]<sub>i</sub> (の) [<sub>N'</sub> そ<sub>i</sub> (いつ) の著書 (という) [<sub>N</sub> 好んで読む本]]]

また (57ab), (58ab) に対応して「鈴木教授」「山田さん」の位置の項を主要部とする関係節を作ってみると、次のような差違が見られる。

- (67) a. 『一般言語学講義』が愛読書である 教授  
 b.?? 『一般言語学講義』が好んで読む 本である 教授
- (68) a. ミニ・クーパーが愛車である 技術者  
 b.?? ミニ・クーパーがいつも 乗る 車である 技術者

日本語の関係節の派生に演算子移動が関わっているとすれば、(67a), (68a) では「中核名詞句」の指定部全体に相当する構成素が移動するのに対し、(67b), (68b) では「中核名詞句」の指定部にある関係節の中からの移動を含むことになり、複雑名詞句制約の違反で容認性が低いことが予期される。



## 5.4. 「総記」

ここで仮定する主要部 ID は「中核名詞句」の指定部を占める記述表現 X について「X が何（誰）であるか」という意味での identity を表し、「中核名詞句」の内項を占める要素がその答え、ないし「値」を表すものである。

逆の観点から言うと、「X が何（誰）であるか」の X の位置に置いて意味をなさない記述表現は問題の ID を主要部とする「中核名詞句」の指定部の位置に置くことができない。

(69) a. タカシのカサ (??が何であるか)

b. タカシが大切にしているカサ (が何であるか)

(70)  $[_{NP} [_{NP} \text{タカシが大切にしているカサ}] \text{(の)} [_{N'} \text{グッチ (という)} [_{N} \text{ID}]]]$

(71)  $*[_{NP} [_{NP} \text{タカシのカサ}] \text{(の)} [_{N'} \text{グッチ (という)} [_{N} \text{ID}]]]$

(72) a. これが タカシのカサだ。

b. これが タカシが大切にしているカサだ。

(73) a. (#)グッチが タカシのカサだ。

b. グッチが タカシが大切にしているカサだ。

西山 (1990) は (72a) について、それが「カキ料理構文」に関連づけられないことを指摘している。

(74) \*タカシは これがカサだ。

(75) a. 花子が、この病院の{看護師 / 医師}だ。

b. \*この病院は、花子が{看護師 / 医師}だ。

(76)  $[_{NP} \text{この病院の} [_{N'} \text{花子 (という)} [_{N} \text{看護師}]]]$

(77)  $[_{NP} \text{(この3人の中での)} [_{N'} \text{花子 (という)} [_{N} \text{この病院の看護師}]]]$

この線に沿って、(69a) は、(78a) ではなく、(78b) のような「中核名詞句」から派生される。

(78) a.  $[_{NP} \text{タカシの} [_{N'} \text{これ (という)} [_{N} \text{カサ}]]]$

b.  $[_{NP} \text{(この文脈の中での)} [_{N'} \text{これ (という)} [_{N} \text{タカシのカサ}]]]$

(79)  $\text{これが} [_{NP} \text{(この文脈の中での)} [_{N'} \text{これ (という)} [_{N} \text{タカシのカサ}]] \text{だ。}$

西垣内 (2015) の分析では、「中核名詞句」の指定部を占める要素を TopP 指定部へ移動することで「カキ料理構文」が派生される。この分析では、移動するのは (79) の「この文脈の中での」という「談話演算子」である。

(80)  $\text{(この文脈の中では) これが} [_{NP} \text{(この文脈の中での)} [_{N'} \text{これ (という)} [_{N} \text{タカシのカサ}]] \text{だ。}$

これまで見てきた構造上の差異が、次の間の対比に反映している。

- (81) a. ??みんなはタカシのカサを知りたがっている。  
 b. みんなはタカシが大切にしているカサを知りたがっている。

(82)  $[_{CP} Op_x [_{NP} (\text{この文脈の中での}) [_{N'} x [\text{タカシのカサ}]]]]$

### 5.5. 主要部内在型関係節

本節では、一般に「主要部内在型関係節」と呼ばれているものは、前節までに見ている、「ID」という非飽和名詞を主要部とする「中核名詞句」から派生するものであることを示していく。

- (83) a. これらがリンゴが皿の上にあったのだ。  
 b. リンゴが皿の上にあったのはこれらだ。

(84)  $[_{NP} [_{IP} \text{リンゴが皿の上にあった (の)}] [_{N'} \text{これら} [_{N} \text{ID}]]]$

われわれの分析では、(84)の内項「これ」の位置に演算子  $Op$  を生成し、これを DP 指定部の位置に移動することで問題の「主要部内在型関係節」が得られる。

(85)  $[_{DP} Op_x [_{NP} [_{IP} \text{リンゴが皿の上にあった (の)}] [_{N'} x [_{N} \text{ID}]]]]$

Shimoyama (1999) は、「主要部内在型関係節」はその解釈に E タイプ代名詞 (E-type pronouns, Evans 1980) が関わることを主張している。

- (86) a. John は Mary が 3 個のリンゴを むいてくれたのを食べた。(Hoshi 1995: 131)  
 b. John は Mary が むいてくれた 3 個のリンゴを食べた。

(86a) が意味するのは、Mary が むいたのは 3 個のリンゴであり、John がそれらを食べたという解釈であり、上記の Mary が 5 個のリンゴを むいた状況では偽となる。

E タイプ代名詞は、Evans (1980: 339) の次の例文によって例示されるものである。

(87) Few congressmen admire Kennedy, and they are very junior.

この文が意味するのは、Kennedy を尊敬し、かつきわめて未熟である議員が少数だと言っているのではなく、Kennedy を尊敬する議員は少数だが、その人たちは全員 未熟だと言っているのである。

(88)  $[_{NP} [_{IP} \text{Mary が 3 個のリンゴを むいてくれた (の)}] [_{N'} \text{これら} [_{N} \text{ID}]]]$

(89) 「これら」 = 「Mary が 3 個のリンゴを むいてくれた」によって存在を含意されるものの identity を過不足なく指定する表現

(90)  $[_{DP} Op_x [_{NP} [_{IP} \text{Mary が 3 個のリンゴを むいてくれた (の)}] [_{N'} x [_{N} \text{ID}]]]]$

ここでいう「主要部」を統語的にスペルアウトする必要がないことは、次の例文によって示される。

- (91) a. 小麦粉を ミルク、卵、砂糖と混ぜたのを フライパンに広げた。  
 b. 水を かちかちに 凍らせたのを こなごなに 砕いた。

## 参 照 文 献

- Carlson, Greg N. (1977) Amount relatives. *Language* 53, 520–542.
- Evans, Gareth (1980) Pronouns. *Linguistic Inquiry* 11, 337–362.
- Higgins, Francis Roger (1973) The pseudo-cleft construction in English. Ph.D. dissertation, MIT. Cambridge, Mass.
- Hoshi, Koji (1995) Structural and interpretive aspects of head-internal and head-external relative clauses. Ph.D. dissertation, University of Rochester.
- Ishii, Yasuo (1991) Operators and empty categories in Japanese. Ph.D. dissertation, University of Connecticut.
- Nishigauchi, Taisuke (2004) Head-internal relative clauses in Japanese and the interpretation of indefinite NPs. *Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin* 7, 113–130.
- 西垣内泰介 (2015) 「指定文」および関連する構文の構造と派生, 査読中.
- 西山佑司 (1990) 「カキ料理は広島が本場だ」構文について—飽和名詞句と非飽和名詞句」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』22: 169–188.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論: 指示的名詞句と非指示的名詞句』東京: ひつじ書房.
- Shimoyama, Junko (1999) Internally headed relative clauses in Japanese and E-type anaphora. *Journal of East Asian Linguistics* 8 2, 147–182.